

《書評》

Ch.ロドイダンバ「清きタミル川」の抄訳と紹介 —登場人物と馬の関係について—

佐 護 愛

はじめに

馬は賢い生き物だよ。馬にはとにかく心から愛情を注いでやるのが大事なんだ¹。



(Ganbat 1998, p.77 より)

これは、20世紀のモンゴル文学を代表する作家の一人Ch.ロドイダンバ(1917-1970)の短編小説「私の栗毛馬(元軍人の話)」²の一節である。敵から何発も銃弾を撃ち込まれながらも走りぬいて主人を救った健気で勇敢な馬と主人の心のつながりを、この言葉に託して表現している。ロドイダンバの描く馬に惹かれてモンゴル文学の世界にのめり込んだ筆者は、彼のいくつかの作品において馬が重要な役割を果たす存在として描かれていることに気が付いた。例えばロドイダンバのデビュー作となる1945年発表の短編小説「帽子をかぶった狼」には、狼狩りの名手ダムディンとその相棒の葦毛馬による臨場感溢れる狼狩りの様子が描かれる。ダムディンがこの愛馬をソ連軍に贈るシーンで物語は幕を閉じるが、1949年発表の長編小説「アルタイにて」において、アルタイ山脈へ地質学調査に向かう学術調査隊のメンバーの一人であるロシア人パノフが、その葦毛馬で独ソ戦を戦ったという回想が描かれる。ここでダムディンが再登場し、調査隊が目的地への道案内人が見つからず困っていたところ、葦毛馬の縁で道案内人を務めることになる。本稿で取り上げる長編小説「清きタミル川」も、印象深い馬たちが描かれるロドイダンバ作品の一つである。

¹ 内田2003, p.119.

² 内田氏の訳ではheerという毛色を「栗毛」と訳出しているが、heerは「被毛は黒味を帯びた褐色で、鬣と尾は赤褐色である毛色」(吉田2013, p.109)であり、これは日本語の毛色語彙の中で「被毛は明るい赤褐色から暗い赤褐色までであるが、長毛と四肢の下部は黒色である」(日本馬事協会2019, p.1)と定義される「鹿毛」により近い毛色であると思われるが、ここでは内田氏訳の表題をそのまま引用した。

「清きタミル川（原題：Tungalag Tamir）」は1961年から1967年にかけて発表されたロドイダンバの代表作であり、20世紀最高のモンゴル小説として名高く、民主化を経た現在までモンゴルの読者に広く愛されている。ロシア語や韓国語など様々な言語に翻訳されているが、日本語訳は現在まで部分的な引用³以外なされていない。今回、部分的ながらも「清きタミル川」から筆者にとって特に思い入れの深い馬に関わるいくつかの場面を翻訳し、小説のあらすじとともに紹介することを試みた。「清きタミル川」の世界観とそこに描かれる登場人物と馬の関係、またロドイダンバの描く馬の愛らしさが少しでも伝われば幸いである。

「清きタミル川」は1914年から1932年のモンゴルを舞台に、ボグド・ハーン政権の自治時代から自治撤廃、人民革命を経て社会主義体制への移行、それに反発する旧支配勢力を中心とした反革命暴動の勃発という激動の時代に翻弄される人々を描いた群像劇である。人間が主役のこの作品において馬はあくまで脇役だが、馬は重要な移動手段であるだけでなく、登場人物たちに寄り添い、時に彼らの運命を大きく左右することすらある。物語の節目に影響を及ぼす馬は「清きタミル川」に欠かすことのできない存在なのである。

「清きタミル川」には高僧や諸侯から貧しい牧畜民まで、当時のモンゴル社会を生きた各階層の100人以上⁴もの多様な人物像が描かれている。一般に「清きタミル川」の最も中心的な登場人物として扱われるのは、主人公エルデネ、その弟トゥムル、エルデネを使用人として雇うイトゲルトという男性3人（いずれも小説冒頭で30歳前後）である。小説の後半になると、エルデネやイトゲルトの成人した子供たちが物語の中心を担う。本稿では、エルデネ、ドルマー（イトゲルトの使用人で後にトゥムルと結ばれる女性、小説冒頭で20歳前後）、ホンゴル（イトゲルトの息子、同10歳）という性別や世代の異なる3人の登場人物が馬と関わる場面を取り上げることにする。

なお本稿で使用した「清きタミル川」のテキストは1971年発表の改訂増補第二版である。それぞれの抄訳の最後に、使用テキストにおける章、節、頁数を付した。

1. エルデネと馬

最初に取り上げるのはエルデネと馬の関係である。物語の冒頭、正義感の強い牧畜民エルデネは領主の不正を訴えるも逆に故郷を追われ、妻ドルゴルと息子バトを連れて首都フレーを目指していた。唯一の持ち馬に荷車を引かせて旅をしていたが、タミル川沿いの草原で一夜を明かして目が覚めると、馬が何者かによって盗まれていた。

³ 田中1967は「清きタミル川」におけるモンゴル民族革命の英雄マクサルジャブが描かれた場面の一部を引用し、ロシア語版からの翻訳で紹介している。

⁴ Ganbat 1998, p.245.

夜が明けきらぬ頃にエルデネは目を覚まし、デールを羽織って表に出ると、繫いでいたはずの馬がいなくなっていた。急いで走り寄ると、繫ぎ紐とともに足枷が落ちていた。辺りを見渡そうとしたが、目の前の黒々とした山が迫ってくるようで、二歩、後ずさりした。

呆然としたまましばらくその場に立ち尽くしていたが、重傷の怪我人が最後の力を振り絞ったような足取りで数歩踏み出し、夜の湿気に濡れた足枷を手にとると、西に薄暗くそびえる山の頂を見つめて「タイシル・ハン山よ。五天神よ。護法尊ゴンボ様よ。どうして見てくださらなかったのです」と呟いた。

エルデネが出て行く気配で目を覚ましたドルゴルは、彼が戻ってくると身を起こし、「天気は良い？」と訊ねた。エルデネは天幕の入り口で無言のまま立ち止まっていたが、足枷と繫ぎ紐を端の方に放ると、「誰かに盗られてしまった」と言った。

「なんですって、うちの馬が？」ドルゴルは声を荒らげ、飛び起きた。

「ああ」エルデネは寝床に敷いていた覆布なしの粗末なフェルトのうえに腰を下ろした。

「これからどうすれば良いの。こんな身寄りのないところで馬がいなくなってしまうなんて……」そう嘆くドルゴルの頬を、涙が伝い落ちた。

彼らの見舞われた悲劇など自分にはまるで関係がないとでも言うかのように、タミル川は絶えず波音を立てて流れ去り、東の空から徐々に明るさを増していく夜明けの光が、眠っていた世界に新しい一日を告げていた。

「泣いたってどうにもならないさ。ほら、涙を拭いて……」エルデネはそう言ってドルゴルに微笑みかけようとしたが、うまく笑えなかった。口角が歪み、くっきりと濃い眉が痙攣する。煙管を取り出して煙草を詰め、何度か立て続けに吸った。

「これからどうするのか」という先の見えない問いがエルデネの脳裏に浮かび、喉が詰まり、眩暈がした。泣いているドルゴルの方を横目で見ると、エルデネはデールに袖を通し、帯を締め、もうここから動かないとでも言わんばかりにどっしりと胡坐をかいた。

「なに、馬を無くして徒歩になってしまったが、死んだわけじゃない。お茶を沸かして飲もう。“生きていれば何か手立てはある、アルガリの火には熾がある”と言うじゃないか」食いしばった歯の隙間から絞り出すような声で、エルデネは呟いた。

第1章1節, pp.12-13.

エルデネ一家はこの後、近くに暮らす富裕牧畜民イトゲルトの元に馬を乞いに行き、イトゲルトに使用人として雇われ、タミルの地にとどまることになる。実はエルデネの馬を

盗んだのは、弟トゥムルであった。ハルハ全土に名を知れた伝説的な義賊トゥムルはこの地に捕らわれており、脱走するためにやむを得ない状況で、兄の唯一の持ち馬だとは知らずに馬を盗んでいた。イトゲルトの息子ホンゴルはこの時、逃亡中のトゥムルと出会い、義賊への憧れを抱くようになる。こうして馬が盗まれたことでエルデネの運命が分かれただけでなく、一頭の馬を起点に登場人物同士に関係が生まれ、物語が展開していくのである。

エルデネと馬について、もう一つ印象的な場面を挙げたい。エルデネ一家はイトゲルトの使用人として懸命に働いていたが、イトゲルトが使用主の立場を利用して欲望のままにドルゴルを襲い、関係を持つ。これを知り、妻に裏切られたと思って激怒したエルデネは、イトゲルトのアイルを飛び出し、首都フレーへ向かう。ここで物語は第2章に移る。モンゴルの自治が廃止され、中国軍が侵攻してくる。さらにウンゲルン率いるロシア白軍もモンゴルに入る。エルデネは当初、モンゴルを救ってくれると信じて白軍に加わり中国軍と戦うが、白軍ロシア兵による罪のないモンゴル人への残虐な振る舞いを見て憤慨。その場を走り去り、行く当てもなく馬で彷徨う。

深い雪の森に続く細い道を、ひどく疲れた様子の馬に跨った人が進んでいた。右の脇腹には木製の銃囊に入った拳銃が揺れ、左の脇腹にはロシア騎馬隊の長い軍刀が下がっている。

真昼の陽光に雪はきらめき、枝に積もる柔らかな雪塊は、風を受けてはらはらと落ちる。何とか歩き続ける疲労困憊の馬の足元から、雪の軋む音がゆっくりと、まとわりつくように響く。地面をじっと見つめて歩を進めるこの人物は、エルデネであった。

白軍を離脱してから数日こうして歩き続けたが、これから自分がどこへ向かい、何をしようとしているのか分からずにいた。分かろうともしなかった。以前のような威勢はすっかり消え失せ、「お父さん、ねえお父さんってば……」と泣き叫ぶ子どもの声が耳から離れず、あの子どもを苦しませた罪はすべて、白軍をフレーに連れてきてしまった自分自身にあるように思われてならなかった。

とうとう馬が止まってしまう、何度か駆り立てたが、動こうとしない。エルデネは仕方なく馬を降り、綱を曳いて力なく歩き始めた。ほどなくして立ち止まると、銃と軍刀を雪へ放り投げた。何よりも無用で、罪深いものから解放されたかのように、体は幾分軽く感じられた。

「こんなものがあっては、誰も幸せになれやしない」と呟くと、一刻も早くそこを離れようと歩き出した。ふと後ろから、誰かの呼ぶ声が聞こえた気がした。

第2章 18節, pp.271-272.

エルデネの苦悩という重苦しい場面に、疲労困憊の馬の様子と、意のままにならない馬とエルデネの攻防がユーモラスに差し込まれている。この時、背後からエルデネを呼びとめたのは人民義勇軍の軍人で、これをきっかけにエルデネは人民義勇軍に加わり、人民革命に身を捧げていく。エルデネの転機には、様々な形で馬が関わっているのである。

2. ドルマーと馬

次にドルマーと馬の関係を取り上げる。エルデネが白軍を離脱して山中を彷徨っていたのと時を同じくして、革命前夜、ドルマーもまた馬とともに草原を彷徨っていた。

若く美しいドルマーは、貧しさからイトゲルトに逆らえず愛人のような関係を結ばされたうえに、表向きにはイトゲルトの使用人ガルサンと無理やり結婚させられた身の上で、世を恨む気持ちで暮らしていた。第1章で羊番中に男に襲われそうになっていたところをトゥムルに助けられ、互いに惹かれ合う。第2章で二人は駆け落ちを果たし、義賊から足を洗ったトゥムルと慎ましく幸せな日々を送る。しかし富裕牧畜民の妬みや欲のためにトゥムルは無実の罪で拘束されてしまう。ドルマーは脱走してきた夫をなんとか逃がすも、独り残された女性に対する近隣の男たちの辱めに耐え切れず、自身もその場を逃れる決意をする。

ドルマーはここを離れる他なくなった。数頭の家畜を老夫婦に託し、二頭の馬で飛び出した。どこへ行こうか、初めは答えが出なかった。二日間彷徨った末に、とにかくトゥムルの故郷ザサグト・ハン旗を目指そうと決意した。

一頭の馬が疲弊して動けなくなった。仕方なく通りがかりの家に置いて行き、先を急いだ。それからかなり進んだが、今度は残る一頭も疲れ切ってしまい、見知らぬ土地で頼りの足を失うことになった。

地べたに座り込み、声をあげて泣いた。疲労困憊の馬は、春先の栄養の乏しい古草を食むだけで何も答えてはくれない。泣きながら馬を曳き、広い山あいの平原を渡った。凍える夜、周囲に家もなく、馬に草を食ませて寒さに凍えながら一夜を明かした。翌朝、先に進むうにも馬の疲労はさらに増した様子で、どうにか引きずり、やっとの思いである一軒の家に辿り着いた。

第2章20節, pp.288-289.

エルデネ同様、ドルマーも後先を考えずに駆け出しているため、やっとなら決めた行先に辿り着く前に馬たちの疲労はピークに達している。夫トゥムルと再会する一縷の望みが、馬によって途絶えてしまった。絶望に打ちひしがれて泣きじゃくるドルマーと、それを気に

も留めない様子で草を食む馬の対比が印象的な場面である。その後、苦難の末にトゥムルと再会を果たしたドルマーは、英雄マクスルジャブ率いる西部遠征軍に合流していたトゥムルと共に人民革命を戦う。革命が勝利して人民政府が発足した後は揃って除隊し、子どもも授かり牧畜民として平和に暮らす。しかし物語の終盤で、ドルマーの馬とのあてのない漂泊は再び繰り返されることになる。

1932年、極端な革命路線に反発する旧支配勢力の聖俗封建諸侯を中心とした反革命暴動がタミル川北部で起こり、止めようとしたトゥムルは殺されてしまう。最愛の夫の死に悲嘆に暮れるドルマーだったが、果敢にも仇を取ることを決意し、またも単身、騎乗して草原を彷徨う。ついにトゥムルを殺した暴動の首謀者を探し出し、ドルマーは復讐を果たした。それに続くのが次の場面である。

一部始終を目の当たりにして震えあがった僧兵は、魂が抜けたように呆然と立ち尽くしていた。ドルマーは握りしめていた支柱を放って崩れた天幕の方を見ると、中であっていた二人は動かなくなったようだった。

「そこのアンタ、この二人を馬にくくりつけて北のソムにいる人民軍に引き渡しなさい！言う通りにしなかったら、ネズミの穴に隠れていても見つけ出すから！」ドルマーはそう言いつけると、繋いでいた馬に跨り、走り去った。

しばらく行ったところで下馬すると、馬の首に抱きつき、しゃくりあげて泣いた。

第4章17節, p.613.

この場面においてもドルマーの絶望が描かれている。復讐は果たしたが、トゥムルには二度と会えないのである。ドルマーは馬の首にすがりつくように泣きじゃくっている。前出の場面では、悲嘆に暮れるドルマーに馬は何も答えてくれなかった。その馬に苦しみを訴えるような、どうしようもない現実を嘆き、救いを馬に求めるような姿が胸を突く描写である。

3. ホンゴルと馬

最後に取り上げるのは、ホンゴルとその愛馬である。人民共和国の社会体制に移行した小説後半、エルデネの息子バトヤイトゲルトの息子ホンゴルを中心に物語は進んでいく。その締めくくりとなる重要な場面においても、馬の存在、馬との関係が登場人物たちの運命を大きく左右することになる。

元々馬が大好きな少年だったホンゴルは、幼少期のトゥムルとの出会いがきっかけで義賊の生き方に憧れて大人になる。駆け足の馬上から地面のものを拾う技や馬の側面にぶら

下がるようにして走る技を習得するなど、馬術にも磨きをかけていた。そんな中、自身の婚礼で憧れのトゥムルから一頭の馬を贈られる。

朝日が昇り、イトゲルトの家から花嫁を迎えに行く一行が出発するとき、トゥムルは連れてきた葦毛馬の曳き綱をホンゴルに渡して言った。「俺からのお祝いだ。こいつに乗って行け。この葦毛は側対歩ジヨロでも、競馬向きでもない。だが、主人を決して歩かせることなく、目指す場所まで必ず届けてくれる馬だ」

この様子を見ていたイトゲルトは大喜びで「これにまさる贈り物はない! 男には馬。しかもこんな男から直にもらえるとは。ほら何しているガルサン、ホンゴルの鞍を置いてやれ!」

男たちの目を奪ったこの胸幅の厚い葦毛は、まさしく駿馬と呼ぶにふさわしい馬であった。後にこの馬は幾度となくホンゴルの窮地を救い、主人を喜ばせることになる。同時に、ホンゴルに大きな災いをもたらすことにもなるのだが、この時はまだ誰にもそれを知る由はなかった。

第3章22節, pp.460-461.

結婚して所帯を持つが、牧畜生活に飽き足らないホンゴルは、愛馬に跨り出掛けてばかりで家に落ち着かない。トゥムルから「時代は変わった」ととがめられるも聞く耳を持たず、とうとう義賊の誓いを立て、馬泥棒をするようになる。ホンゴルが馬泥棒の罪人として追われ、山に潜んでいたところ、今は学校建設に邁進する幼馴染のバトが通りかかり、二人は再会を喜ぶ。「お前なら真っ当な道に戻って人の役に立てる」という親友バトの後押しもあり、ホンゴルは人民軍に参加することを決意する。アルハンガイへ向かうバトとともに、人民軍入隊の希望を抱いたホンゴルが葦毛の愛馬を走らせるのが次の場面である。

二人は連れ立って馬を走らせた。ホンゴルの葦毛馬が頭を下げて軽快な速足で進む一方、バトの乗る若い牝馬はあらん限りの力についていった。話に夢中になっていた二人は、春の痩せた牝馬が疲れ切って動けなくなるなど考えに入れていなかった。気が付いたときには、牝馬は力尽きて一歩も動けなくなっていた。

「そいつは置いて行って、俺の葦毛に相乗りしていこう」

「こんな人っ子一人いないところに置いて行ったら、狼に食われてしまうよ。一晩休ませたら次の集落までは走れると思うんだけど」

「本当ならアルハンガイまではもうそれほど遠くないところまで来ているんだけどな。じゃあ、そいつの端綱を俺の馬の首に結んで放しておくといい」

「いなくなってしまう？」

「俺が活着ている限り、この葦毛が俺を徒歩で行かせるようなことはしないよ」

ホンゴルの言う通りに、二頭を結び付けて放した……（中略）

夜明け間近になって二人は東の間まどろんだ。眠りこんでいたバトをホンゴルが起す頃には、東の山の頂から空が白んでいた。

「はやいとこ出発しよう」ホンゴルは立ち上がり、グルルィ……グルルィ……と節をつけて呼ぶと、葦毛馬が首に結びつけられた牝馬を曳いて駆け寄ってきた。

「そらの人間よりずっと頼りになる相棒だね」

「全くだ。軍へはこいつも連れて行くよ」ホンゴルは喜色満面にそう言った。

第4章12節, pp.573-574.

バトと別れた後、ホンゴルは人民軍へ向かうが、罪人として拘束されてしまい、葦毛馬とともに脱走し、反革命の反乱軍に加わって生き延びる道を選ぶ。武装蜂起した反乱軍と人民軍の戦闘が繰り広げられる中、バトの勤める学校のあるソムも襲撃を受ける。反乱軍に捕まって処刑されそうになった親友バトを、ホンゴルはこっそりと逃がすことにする。

その晩、ホンゴルは自分の葦毛馬にバトを乗せて言った。「気を付けて行けよ。きつとお前は仲間と合流して武器を取り、俺と戦いにやって来るだろう。俺たちの道は完全に別れた。もう二度とこうして会うことはできない」ホンゴルはバトの手を固く握った。「じゃあな、バト。さあ、早く行け」

第4章15節, pp.599-600.

この後ホンゴルは、バトを逃がしたことで裏切り者として捕まりそうになるが、反革命武装蜂起の首謀者の一人であるトゥグジルの馬を奪うと、自慢の馬術を駆使して逃げ出すことに成功する。人民軍にも反乱軍にも追われて行き場のないホンゴルは家族を探して走るが、皮肉にもそのホンゴルを迎え撃ったのは、自分の愛馬に跨り、人民軍の援軍を連れ戻ってきた親友バトだった。

ホンゴルは誰もいない家に入り、煙草を吸いながらしばらく座り込んでいると、息子の小さな幼児靴ボイトグが目に入った。左右を揃えるように両手に取り、胸にぎゅっと押し当てたまま、眉をひそめて思考を巡らせた。

「どこへ行く？ 妻と息子は、父さんも母さんもどうしているだろう。バトは生き延

びたか？」などとあれこれ疑問は浮かぶのに、答えが出ない。この数日の出来事で心に負った深い傷は彼を蝕み、まともにものを考える力がなくなっていたのである。

幼児靴を懐にしまい、外へ出た。またしても「どこへ行くのか」という問いが沸き上がってきた。実際、行くあてなどどこにもなかった。戦っているどちらの側にも、面目がなくなってしまったのだ。探し求めていた妻子がどこに身を潜めているのか分からないというのに、どこへ行けというのか。

「とにかく父さんに会おう」という考えが浮かび、馬を解いて跨った。しばらく走ったところで、バトたち人民軍の一団と行き当たった。兵士の一人が「何者だ？ 止まれ、さもないと撃つぞ!」と大声で叫ぶと、ホンゴルは手綱を引いて馬を止めたが、次の瞬間、踵を返し全速力で駆け出した。

叫んだ兵士が発砲した。ホンゴルは馬の左側面へゆっくりと身体を倒した。あたってぞ、と別の兵士が声をあげると、「いや、俺はまだ生きている」と答えるかのように、鞍の上に身を起こした。

もしこれが彼の葦毛馬なら、死んだように見せかけて馬体の側面に身体を預けたまま、銃弾の届かない場所まで駆け抜けられるはずだった。しかしトゥグジルの馬はそんな訓練を積んでいないため、すぐに鞍の上に戻らなければならなかったのである。その瞬間、バトが引き金を引いた。

肺を貫き撃たれたホンゴルは身を屈め、よろめいたかと思うと、疾走する馬の勢いに振り落とされ、遙か遠くの方でぱったりと倒れて動かなくなった。

バトはぴくりとも動かずに横たわる人物の様子を仲間たちとともにしばらく窺ってから、兵士を一人連れて騎乗し、確認に向かった。長く生い茂った草むらに突っ伏したホンゴルの血が、辺りを赤黒く染めていた。すぐそばには幼児靴が転がっている。

バトは馬を降り、倒れている人物を仰向けにするやいなや「おい、嘘だろ、ホンゴル!」と抱き起こした。

「ホンゴル! 僕だ、バトだよ」と叫ぶも、返事がない。命の灯の消えかかった目がうっすらと開いて、じっとバトを見つめると、かすかに微笑み、そのまま息を引き取った。

バトは親友をひしと抱き、その目からは大粒の涙がとめどなく溢れた。ホンゴルの血だらけの顔には夢を見ている子どものような笑みが浮かび、青ざめた唇はわずかに開いていた。

じりじりと熱い太陽が強く照りつけ、頬を寄せるバトの顔に、固まりかけたホンゴルの血がついた。

ホンゴルの葦毛馬はバトの肩の上から首を垂れ、息絶えた主人のにおいをしばらく嗅いでいたが、慣れ親しんだ主人の亡きがらを埋める場所を掘るように、蹄で地面を

搔いた。

第4章16節, pp.603-604.

以上がホンゴルと葦毛の愛馬の物語であり、「清きタミル川」のクライマックスである。最後の葦毛馬の様子に、二人の絆が、切ないほどに美しく描かれている。これまで紹介してきたエルデネとドルマーの場面においては、人間に対して馬が何か答えることはなく、その心理も表現されてこなかった。それに対して葦毛馬の蹄で地面を搔くという動作には、主人の死に対する馬の気持ちが、比喻を用いて効果的に表現されているのである⁵。

おわりに

ロドイダンバは馬好きの父親の影響で幼い頃から馬を愛し、その扱いにも長けていたという。妹ツェンドスレンの回想には、若き日のロドイダンバ少年が馬上からぶらさがる体勢で地面に転がる石を掴む練習に励んでいた姿が記録されている⁶。ロドイダンバにとって思い入れの強い馬が、彼の代表作「清きタミル川」においても欠かせない存在であることを、3人の登場人物との関係から見てきた。

盗まれたり、言うことを聞かないなど、エルデネにとって馬はなかなか思い通りにならない。ドルマーは独り絶望の淵に立たされた時、傍にいる馬に救いを求めた。ホンゴルとその愛馬は苦楽を共にし、深い絆で結ばれている。このように馬との関係は三者三様だが、共通しているのは、その後の人生を左右する大きな分岐点には必ず馬が関わっていることであり、それは3人以外も含めた登場人物たちにとっても同様である。物語の冒頭で、エルデネの馬を盗んだおかげでトゥムルは生き延び、エルデネは馬を失ったことでイトゲルトと出会う。革命期にエルデネとドルマーは行く当てもなく彷徨い、馬の疲労が契機となって人生の新たな局面を迎える。反革命暴動期、ホンゴルは親友バトを助けるために葦毛馬に乗せて逃がし、これがバトの命を救うが、ホンゴルの命を失う原因となる。激動の時代、彼らはその場その場で生きるための選択を迫られる。馬は生き延びるための頼りの足であ

⁵ ロドイダンバは他作品でも、最後の場面を馬の所作で締めるという手法を取り入れている。例えば「帽子をかぶった狼」の最後は、蹄で地面を搔く馬の描写である。「委員長が葦毛の馬をいそいで引いていって繋ぎ紐につなぐと、馬は遠く去っていくダムディンの背後から、鋭敏な耳を動かし、じっと彼を見つめていたが、しきりと頭を振り、蹄で地面を蹴るのだった」(荒井1984, p.47) また牧畜民の少年の甘酸っぱい恋を描いた短編小説「ソロンゴ」の最後では、「清きタミル川」の葦毛馬と同じように、馬の心理が比喻を用いて表現されている。「『行ってしまった』と呟き、馬の方に目をやると、『ああ、行ってしまったね』とでも答えるかのように、馬はかぶりを振るのだった」(阿比留2017, p.70)

⁶ Tsendsüren 1992, p.36.

り、馬の存在や能力が、彼らの命運を握っているのである。

本稿では3人の登場人物に絞って馬との関係が垣間見えるいくつかの場面を訳出したが、作品全体における馬の役割についても機会を見つけて考察を深めたい。さらに今後は、「清きタミル川」に描かれる個性豊かな登場人物像についても紹介していきたい。

「清きタミル川」出典

Ch. Loidamba. *Tungalag Tamir: Nemj zassan hoyor dahi udaagiin hevlel*. Ulaanbaatar. 1971.

参考文献

- 阿比留美帆 (訳) 「ソロンゴ」『恋と嫌悪：ロドイダンバ短編集』Admon. pp.49-70. 2017.
- 荒井伸一 (訳) 「帽子をかぶった狼」荒井伸一, 蓮見治雄, 松田忠徳 (編) 『帽子をかぶった狼：モンゴル短編集』恒文社. pp.21-47. 1984.
- 内田孝 (訳) 「私の栗毛馬 (元軍人の話)」芝山豊, 岡田和行 (編) 『モンゴル文学への誘い』明石書店. pp.116-120. 2003.
- 田中克彦 「ハタンバートル・マクサルジャプーモンゴル独立運動指導者の一つの典型」『一橋論叢』第56巻(6). pp.749-769, 1967.
- 吉田順一 (監修) 『モンゴル遊牧文化用語辞典』モンゴル国立大学国際言語文化学部日文学科. 2013.

B. Ganbat. *Mongolyn songodog zohiolch Chadraabalyn Loidamba: amidral, uran büteel*. Seoul. 1998.

Ch. Loidamba. *Altaid. Tüüver zohiol*. Ulaanbaatar. pp.79-236. 1977.

Ch. Tsendsüren. *Minii ah Ch. Loidamba*. Ulaanbaatar. 1992.

参考URL

- 公益社団法人日本馬事協会「馬の毛色及び特徴記載要領 (第8版)」2019. <https://www.bajikyo.or.jp/pdf/keiro8.pdf> (最終閲覧：2022年2月28日)

(東京外国語大学言語文化学部モンゴル語専攻4年)